

SHINWA WALK 24

円通寺の火渡り伝説

伝説
そぞろ
歩き

火渡りは
常夏のごとし
厄落とし
心頭滅却
火もまた涼し



素足で火渡る勇者たち

他では見られない奇祭

円通寺は今から1800年ほど前、日本武尊を火難から救った秋葉大権現が、この地に日本で初めて秋葉神社として尾張氏によって祀られたのが由来とされています。弘仁2年(811年)、弘法大師(空海)が熱田神宮に参籠の際、秋葉出現の霊山であるこの地に小さな堂宇を建て、自刻の十一面観音像を奉納して祀り、松下の観音堂と称されていたのが、お寺としてはじまりとされています。

火渡り神事は、文字通り火の中を渡っていく神事で、毎年12月16日の夜に行われます。秋葉三尺坊が悟りを開いた日を縁日として神事が行われるもので、昔は旧暦11月16日に行われていました。「秋葉山の火祭り」として広く知られていて、火の中を歩くことにより、1年間のけがれを払い落とし、火除けと厄除けが成就できるといわれています。

当日は19時半頃、5〜6人の行者の後ろを、揃いの白装

束をまとった信者が列を作り入場します。足元を見ると全員が素足。10m四方に護摩木が撒かれた火場の回りに集合すると、神事が始まります。

信者たちが火のついた薪木を持って火場を囲むように並び、薪木を一齐に火場に入れると、一気に火が上がります。信者たちは勢いよく燃え盛る火場を輪になって回ります。そして、ここからがいよいよ祭りの佳境です。

最初の行者が1m以上はあろうかという炎の中に一気に入り渡っていき、すぐさま数人の行者がそれに続き、詰めかけた観客から「わあ」と歓声が上がります。

行者に続いて信者たちも列を作って火の中を渡っていきます。もちろん素足。なかには、小さな子供もいて、無事渡り終えると、観衆から拍手が上がります。「心頭を滅却すれば火もまた涼し」といいますが、見ている観客の方がハラハラ。常夏以上の熱気に包まれます。

天に登る飛竜のように燃え上がる炎とその中に入っていく行者の勇姿は、他の祭りでは見られない奇祭ならではの光景です。



人類の起源・プロメテウス

「パンドラの箱」の謎も

ギリシャ神話で火にまつわる神といえば、プロメテウス。人間を創ったのは、プロメテウスとエピメテウスの兄弟です。先に考える人・プロメテウス、後に考える人・エピメテウスという意味で、プロメテウスが計画してエピメテウスが創っていきました。いわば人類の起源ともいえます。

人間ができた時、天から火を盗んできて人間に与えたのがプロメテウスです。そのおかげで人間は百獣を統率することになりました。しかし、それを知ったゼウスは、プロメテウスをコーカサス山に鎖でつないで大鷲にプロメテウスの肝臓を突つかせました。肝臓はまた生えてくるので、次の日も大鷲がやってきていつまでも苦しみが続きます。何百年もした後、ヘラクレスによりやっと解放され自由になりました。

また、パンドラの箱もギリシャ神話から生まれた言葉で



▲円通寺で毎年12月16日に行われる火渡り神事。

す。エピメテウスはプロメテウスの「神からの贈り物は受け取ってはいけない」という忠告を忘れて、神からの贈り物であるパンドラを妻にしてしまいました。パンドラとは「すべての贈り物」という意味。パンドラは箱を持っていました。

パンドラは「決して開けてはいけない」と言われていたにもかかわらず、ある日好奇心に駆られてその箱を開けてしまいます。黒煙が立ち上がりあわてて蓋を閉めましたが、もう遅い。病気、悪魔、戦争、嫉妬、猜疑心、利己心など逃げ出してこの世に蔓延しました。しかし、最後に希望だけが箱の隅に残っていました。それで今でも、どんな時にも希望だけは最後まで残っているのです。

その後、エピメテウスとパンドラが結婚して生まれた娘ピュラは、プロメテウスの息子テウカリオンと従兄弟同士の結婚をしました。人類を滅ぼす洪水をゼウスが起こした時、プロメテウスからそのことを聞いていて準備していた2人だけが生き残りました。

「新しい人間の仲間を創りたい」と祈ると、法と技の女神・テミスに「母の骨を投げなさい」と言われます。そこで、母なる大地の骨である石を投げると、テウカリオンが投げた石は男に、ピュラが投げた石は女になり、新しい人間たちが再びこの世に生まれたのです。

プロメテウスのおかげで火を手に入れた私たち人類はその後、次々に便利なものを発明し、最近ではネット社会の功罪が問題になっています。便利すぎるものも考えものです。

※今回は見晴台遺跡伝説について特集します。お楽しみに。

- 写真 / Kiyoshi K
- イラスト / Rei
- 取材文 / Icarus